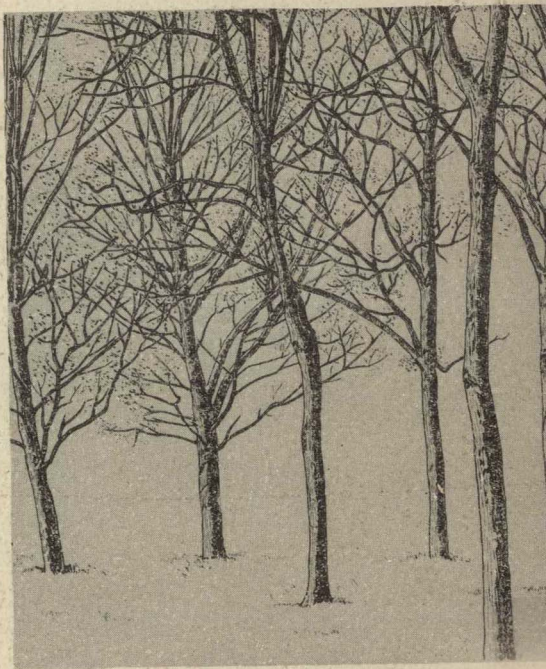


山村暮鳥詩集

藤原 定 編
大江 満 雄



© 1966

世界の詩 40

山村暮鳥詩集 350円

昭和41年9月30日 初版発行

昭和46年12月15日 2版発行

編者 藤原 定
大江 満 雄

発行者 津 曲 篤 子

印刷者 橋 本 伝 四 郎

発行所 株式会社
彌 生 書 房

162 東京都新宿区中町18番地
電話・東京 (260)3707(代表)

0392-6615-8525

山村暮鳥詩集

藤原定編
大江満雄

山村暮鳥詩集
目次

I

初期詩篇 より

春

春と若き人々の思想

「三人の処女」より

独唱

心

沼

冬の辞

三人の処女

黄い月

低唱

秋意

祈禱

二〇

三三

三四

三五

三六

三七

三八

三九

四〇

四一

II

「聖三稜玻璃」より

囁語

大宣辞

曲線

手

だんす

烙印

愛に就て

青空に

曼陀羅

岬

光

くれがた

鑿心抄

風景

いのり

三三

三四

三五

三六

三七

三八

三九

四〇

四一

四二

四三

四四

四五

「黒鳥集」より

光明頌栄

なやみに就て

昼の月

智慧の木

壺

蔓

芽

薄暮

雪景

わたしはたねをにぎつてゐた

「昼の十二時」より

犬に

挿話

私ではない

じゅびれえしよん

三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

網を投げる人

III

「風は草木にささやいた」より

人間の勝利

穀物の種子

彼等は善い友達である

父上のおん手の詩

曲つた木

梢には小鳥の巣がある

種子はさへづる

針

憂鬱な大起重機の詩

人間に与へる詩

海の詩

キリストに与へる詩

大きな腕の詩

新聞紙の詩

四

三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

秋のよろこびの詩

道

朝の詩

単純な朝食

その梢のてつべんで一はの蕪が

ないてゐる

麦畑

労働者の詩

老漁夫の詩

自分はいまこそ言はう

薄暮の祈り

「梢の巢にて」より

ふるさと

春

詩人・山村暮鳥氏

山上にて

星

ある時

六

六

六

七

七

七

七

七

七

七

七

ある時

ある時

断章

「土の精神」より

雪景

虹

星を聴く

「万物節」より

喫茶の詩

りんごよ

海はひえびえと……

憎悪のなかにも……

丘の上では……

秋ぐちは……

身自らにおくるの詩

蛙の詩

七

六

六

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

「穀粒」より

貧賤抄

友に書きおくる

二四
二五

VI

「雲」より

春の河

おなじく

おなじく

蝶々

野良道

雲

おなじく

ある時

こども

おなじく

二六

二六

二九

三〇

三〇

三一

三一

三三

三三

三四

おなじく

馬

おなじく

おなじく

ゆふがた

朝顔

驟雨

病牀の詩

おなじく

おなじく

月

おなじく

西瓜の詩

おなじく

二たび病牀にて

ある時

朝

野糞先生

読経

蚊柱

三四

三五

三五

三六

三六

三七

三六

三六

三九

三〇

三〇

三三

三三

三三

三三

三三

三四

三五

三五

三七

ある時
ある時
ある時
ふるさと
いつとしもなく

一三
一三
一三
一三
一四

「月夜の牡丹」より

解 説

一五

略年譜

一五

月夜の牡丹
ぼたんの教へ
ある時
朝顔
ある時
おなじく
おなじく
昼
名刺
ある時
おなじく
おなじく

一四
一四
一四
一四
一四
一四
一四
一四
一四
一四
一四
一四

口絵写真／明治末、二十七・八歳頃の暮鳥
口絵筆蹟／群馬県群馬町立中央中学校にあ
る暮鳥詩碑（一九五八年建立）

おなじく
おなじく
卷末の詩

一四
一四
一五

春

野を見よ。

風の温かき戦せまぎに触れて

若草の少女せうじよごころぞ

夢と咲き、

黄に、むらさきに、紅に

かをりぬ、光とろくくと。

かゝる日

溶くるものあらば

「不信」に癡りし石の魂

はた眼縫はれし

をとりこ
陽籠やうろうの

小鳥が舌の春の歌。

春と若き人々の思想

幼児の如き瞳よ！

青き瞳よ！

忘却の死ネクロにすてられた春の憂愁が心好く匂ふ。

薄緑りの昼の光線、

煙りのやうな糸を垂れて柳が風もないのに揺ぐ時、

あゝ経験の中心より

滅びひろがる夢の灰色よ！

されど若き人々の思想は、

忍び、

見よ彩色した乳色の如く赤き肌衣にかくれて飲ぶ。

独
唱

かはたれの
そらの眺望ながめの
わがこしかたの
さみしさよ。

そのそらの
わたり鳥、
世をひろびろと
いづこともなし。

心

稗^びをぬかずば農民よ

こがねなす、

田の面^{おも}のひかり、

稗^びをぬかずば

淫慾^{いんよく}にぬらす秘密の、

涙^{なみだ}は朝の雨のごとし

かなしみは光に黒く、

靈^{たましひ}の上を長く。

農人よ、

空は唯、ひろしと言へど、

とこしへに汎きのみなる。

沼

やまのうへにふるきぬまあり、
ぬまはいのれるひとのすがた、

そのみづのしづかなる

そのみづにうつれるそらの

くもは、かなしや、

みづとりのそよふくかぜにおどろき、

ほと、しづみぬるみづのそこ、

そらのくもこそゆらめける。

あはれ、いりひのかがやかに

みづとりは

かく、うきつしづみつ、

こころのごときぬまなれば

さみしきはなもにほふなれ。

やまのうへにふるぎぬまあり
そのみづのまぼろし、
ただ、ひとつなるみづとり。

冬の辞

かはたれのどよめきが生む
うすむらさきの愛の霧、
沈鬱なる白き指先にて
いと、いと、軽く
雪空はびあのを打つ——